

初修中国語教学における「助動詞」の扱い About Dealing with Auxiliaries in Teaching Beginner Chinese

西井和弥（名城大学 外国語学部非常勤講師）

NISHII Kazuya

要約

初めて中国語を学ぶ学習者にとって重要なインプットの順序において、当然のことながら間違いの起こりにくい平易なものから構成されるべきシラバスが、その主流ではどうしても文法的序列の発想なのか助詞「了」が先になり、非常にわかりやすい助動詞があとになることをまず再検討し、提示順序の再構成を提案する。そして、入門初級レベルで扱うがゆえの短い例文やシンプルな構造解説ならでは生じる現実に潜むもう一つの語義、「誰にでもできること」をあえて可能の助動詞で表現するときに「高いレベル」になる点を、教員がしっかり理解したうえで教学現場に備える重要性を論じる。

For a beginner of Chinese learning, the important order of priority is certainly in the syllabus, which should be hardly error-prone and constituted simply. However, in many published general textbooks, due to the influence of grammatical sequence idea, the particle “le” (了) comes first and those auxiliaries, which are much easier to understand for Japanese learners, fall behind. I intend to make a reexamination in this regard and propose a reconstitution of priority order. I will then discuss the importance of the possibly short example sentences dealing with the beginner and elementary level, the realistic issues caused by the simple structural explanation in the beginner and elementary level, actually “a higher level” when being presented for those auxiliaries, which “everyone can deal with” at the first glance, where should they be presented based on the solid understanding for instructors, and how to respond to misuse and query. My focus will be on course design and performance in the classroom regarding those auxiliaries which can be used to show skill and ability in learning them.

キーワード：初修中国語, 助動詞, 提示順序, 可能, 技能

1. はじめに

大学主専攻としての教学を除けば、週1-2回の授業で適度なペースを保って効率よく初修の外国語教育を施すことは並大抵のことではない。自分も含めてこれまで教員諸氏はこの根本的な問題に絶えず取り組み、主流といわれるものを形成してきている。それを否定したり理解しなかったりというつもりは毛頭ないが、実際の教学現場でのさらなる効果を鑑みた改善の一環として本稿では「助動詞」の扱い、主に提示順と可能に関する説明方法について一石を投じてみたいと思う次第である。

2. 文法シラバスにおける「助動詞」の扱い

2.1 文法シラバスを中心とする展開

本稿は「助動詞」という文法項目を挙げて論述を展開するものである。そしてそれが教学の中でどう扱われるのかを対象とする。したがって授業を進めるうえでの教材をどうしても中心に据えることになり、そのうえで教材の中の提示順序はとても大切なポイントの一つとなってくる。

連続授業の教材では当然継続性・関連性を保つためのシラバスが重要になり、大きく分けて通常は①文法、②場面、③機能、④技能、⑤話題、⑥タスクの6種類のシラバス(構成)があるわけだが、教学の点であらかじめ時間的・組織的縛りがあれば、実現自体が難しいシラバスがほとんどで、本稿で扱おうとする週1-2回の教学条件においてはなおさらである。そのような状況もあって日本国内で出版・使用されているほとんどの教材は①文法シラバスか②場面シラバスに集約され、②場面シラバスにおいてもポイント提示はほとんどが「文法項目積み重ね型」を採用していることから、日本の初修中国語教育において文法シラバスはほぼ前提となっているというのが現状である。

加えて筆者自身の実体験も踏まえて認識しているのが、日本人のとりわけ成人学習者の学習スタイルとして、文法中心学習を自らも望み、理屈や裏付けが曖昧だと不安になるという性質からも、文法シラバスは一番ニーズに合っているものだということである。大学生も十分その範疇に入ると考える。(強制力を前面に打ち出す場合は例外であるが。)なぜ文法シラバスなのかという件については別論に譲るとして、現実的に文法シラバスが多い教材事情・教学事情という前提は残し、その範疇での提示や内容の検討を本稿では進めていく。

2.2 実情概観

すべての教材を対象とすることは不可能且つ無意味である。そもそも現在ポピュラーなものとして世に出ているもの自体がすでに様々な事情を背景にして作成され、且ついい意味で検定なども経ていないのであるから、主流とは言えても王道と断ずるには無理がある。ただし大きな方向性はここ20-30年シラバスにおいて変化がそれほどないので、ランダム

ではあるが比較的一般的のサンプルとしてなじむであろう以下のものをまず見ていくこととする。

白水社：a『中国語はじめの一步』

b『1年生のコミュニケーション中国語』

白帝社：c『標準中国語 基礎編』

d『中文在線 基礎編』

朝日出版社：e『日中いぶこみ広場（簡明版）』

f『いつでも中国語1』

なお内容量が多く長時間の授業を想定して編集されている中国出版の教材や厚い教材については本稿では対象外とした。また上記に挙げたものの選定について批判する意図等他意はなく、比較的現場で使いやすいようなオーソドックスなタイプの例として挙げているにすぎない。むしろよく練られていて著者の思想がどれも感じられる工夫の多いものと認識している。実情概観以上でも以下でもないため、著者・出版年等は割愛する。検索については書名・発行元で十分可能である。

上記6種の教材について文法シラバス（各課の内容構成）を一覧にしたものが表1である。なおどれも冒頭に発音要領の頁があるが、そこは共通として割愛している。見やすく且つスペースを節約するため中国語にて略記をさせていただく。区切りは課ごと、上から下に向かって課が進む。

表1：6種入門総合教科書各課文法項目対象一覧（拙作）

a	b	c	d	e	f
人称代词,是	人称代词,是,呢,也,请	人称代词,	代词,是,吗,姓,叫	是,姓,叫,人称代词	人称代词,动词,是,也,什么
指示代词,疑问代词,的,也	指示代词,吗,不,什么,的	是,也,都,的,指示代词	有,形容词,的,量词,数词	的,哪个,什么,呢	指示代词,形容词,程度副词,的,都
动宾句,有,呢	指示代词,形容词,怎么样	吗,形容词,太了,不太	方向词,从,到,有,量词	动宾句,也,连动句,指示代词	这儿/那儿,在,有,方向词,量词,数词
量词,形容词,多少/几	数词,吧	有,这儿/那儿	在,了,连动句,双宾句	想,形容词,指示代词	时间词,连动句,除了-以外
数词,时间	在,想,方向词	动宾句,数词,量词,多少/几	时间词,比较句,疑问代词	年龄,有,比较句,数词	多少/几,双宾句,想,金钱

了,在,想	有,什么+名词,量词	时间词	会,能,过,动词重叠	过,喜欢,要,数词	了,是-的句,要-了
在,离,有	了,还是	过, 动词重叠,了	离,对,着,在,趋向补语	时间词,在,了	时量补语,动量词,动词重叠
时量补语,得,从	过,时间词	在,着,了	了,就,-多了,会(可能性)	从,往,了,时量补语,量词	会,能,可以,应该,要,得,地,形容词重叠
过,是-的句,跟,给	从,跟,时量补语,双宾句	会,能,结果补语	可以,是-的句,着	在,是-的句,在-呢,方向词	结果补语,因为-所以-,如果-就-
能,会,程度补语,动词重叠	可以,能,会,在,动词重叠	可以,应该,要,趋向补语	还是,给,被字句,把字句	能,结果补语	兼语式,趋向补语,从,离
在-呢,连动句,还是,宾语提前	给,连动句	从,是-的句,双宾句,跟,刚/刚刚-刚才	为,听说,程度补语	会,双宾句,程度补语	
比较句,的,双宾句	是-的句,	怎么,程度补语,着,又-又-(※続)	动作次数和量,又-又-,快-了,地	趋向补语,动词重叠,可以(※続)	

※c,eについてはそれぞれ20,16課までであるが、本稿の趣旨を鑑み13課以降は省略。

そもそも文法シラバスにおいて絶対的な基準が存在するものではなく、また教材においては文法項目以外にも本文としての会話や文章の「都合」もあり、各執筆者がどうしてもオリジナリティを追求する傾向も否めないところから、多少の提示順序や配分の采配には違いが出てくるものであるが、一方でおよその流れには他とそれほど変わらない特徴も形成されていく。というより、教員としての執筆者は当然教員相互の「交流」「学び」を経て、自作が他の教員にとっても理解しやすく使いやすいものにするためには一方的に突っ走ることもない。というわけで、入門から初級の文法項目提示順序はだいたい以下のようなステップを経ているようである。

Step 1 挨拶用語の学習による導入

Step 2 代名詞・動詞・形容詞・肯定文・否定文・疑問文・疑問詞等基本パーツ導入による文の基本的な作り方を指導

Step 3 「了」の基本的なインプット

Step 4 各種助詞・数詞・量詞・数字・時間詞・時量補語

- Step 5 各種助動詞・「过」・動量詞・「是－的」構文・比較表現・程度(様態)補語
Step 6 方向補語・存現文・結果補語・受け身表現・使役表現
Step 7 「把」構文

この提示順序には様々な背景が存在するものと考えられ、特に取り扱う例文・本文の内容を考慮したことによる影響が多いと推測される。Step 3 までは基本中の基本である項目を一気にインプットし、Step 4 以降は既習項目を混ぜて少しずつ文を長くすることで文が成立するようという配慮である。

多少の入れ替えは既習事項との関連性において影響のない範囲において十分可能であるから、教材によつての異なる部分があつても驚くことではない。ただし、一部の順序については既習事項との関連性や本文の内容構成上の都合とは異なる別な事情が無意識のうちに働いているのではないと思われる点がある。たとえば「了」の提示や数字関連の提示順序等がそれにあたる。おそらく、まず修飾成分を含めずに構成できる要素をすべて提示するという積み上げ式発想を重視することによる結果ではないであろうか。そして本稿ではその一例として「助動詞」の扱いについて着目するものである。すなわち「助動詞」はその形態のわかりやすさに反して、難易度の比較的高い「了」や各種助詞よりも一般的にあとの提示に設定されていることが多いのである。

なお前表で b は「了」よりも先行して「想」が、c は「了」よりも先行して「要」が、そして a は「了」と同じ課で「想」がそれぞれ配置されている。これについては助動詞を早い段階で、すなわち「了」よりも先に教えて差し支えない一例ともしたいところである。もともと「想」「要」はどちらも願望を表すものとして非常にシンプルな使い方ができるものであること、そして教材のスキット作成および運用の際に手軽に導入しやすいというメリットが先行させた理由であると思われ、助動詞の教学というよりは一表現形として簡便に扱っているのが、教材ではやはり珍しいタイプという理解が妥当ではないかと考える。表現形としても「～へ行きたい」「～が食べたい」「～が見たい」とごく限られた提示のしかたにとどまっている。しかし実際にはそれをより拡張したとしても、助動詞は文法的には一つ高いステージの項目でありながら、「了」のような使用における判断を求め且つ中国語の特殊な時制概念に絡む難易度の高さからすると、より導入しやすい項目ではないかと考える。

2.3 初修中国語文法シラバスでの「助動詞」の前倒しについて

結論からいうと、多くの教材で比較的あとの段階でようやく提示される助動詞を、より早い段階で、特に「了」よりも前の段階で提示することを提案するものである。

まず助動詞についてであるが、中国語においては基本的に時制による述語動詞の変化や操作という問題がない。

多くの述語用言の活用を有する言語においては、助動詞についても例外ではなく、時制そのものが早い段階で学習者にとって第一難関となる。一方中国語においては誤解を恐れずマクロ的視点でいうと、時制という概念は複雑でないかわりに非常に曖昧に存在し、極論をいえば語彙と背景解釈にゆだねる部分が多い。

① 我会弹吉他。

これは「わたしはギターが弾ける」であるが、前後背景次第で「わたしはギターが弾けた」にもなる。逆にいえばこの助動詞文において「現在形」「過去形」といった文法上の区別は不可能である。

② 小时候我很想去北京。

これは紛れもなく「小さい頃わたしはとても北京に行ってみたかった」だが、「小时候」を除いてしまえば「行きたい」と解するのが最も自然である。

このように助動詞はただ語義と語順のみを把握することで簡単に習得できる項目である。（「想」については本来「動詞」であるが、対外漢語教育での常識にしたがってここでは助動詞の一つとして取り扱う。）むしろ学習者にとっては助動詞よりこの独特な時制に関する感覚を理解するほうが難関であるが、それはすでに「是」や動詞・形容詞の基本を学ぶ時点で説明しなければならない点であるので、ここが助動詞の難点とはならない。

つまり積み上げ式文法体系という視点から見ると基礎中の基礎項目とはいえない助動詞ではあるが、教学における提示順序においてはとても理解しやすい項目として早い段階でとりあげることは決して無理なことではない。教学現場での経験からみても、「了」や各種助詞、場合によっては大量の時間詞等で早くもつまづいてしまうより、助動詞を先に扱う方が効果的ではないかと考える。

3. 助動詞の範囲

3.1 範囲と分類

次に「助動詞」として入門初級レベルではどこまでをどう取り扱うのがよいのかを検討したい。その際、消化可能かどうか、運用可能かどうか、この2点をしっかりと見極める必要がある。

果たして中国語には一体どれくらい助動詞があるのかというと、まず助動詞という分類をどうするかが問題になる。少なくとも『現代漢語詞典 第7版（以下現漢）』（商務印書館 2016）では品詞マークに助動詞という分類はなく、「**動** 助動詞。」という記述になる。また助動詞という用語自体を使わない学者も多数おり、能願動詞と称して分類上はあくまでも動詞のカテゴリーに入れている。『動詞研究』（河南大学出版社 1995）ではなんと「将」「怕」「值得」等も助動詞として論じられている¹。

ただ本稿ではあくまでも初修中国語の教学文法シラバスにおける助動詞に着目しているわけで、且つ助動詞という用語は学習者の理解を促しやすいものとして使用するという前

提に立つので、むしろセレクトしていくことを中心に考えるのが妥当である。

そこで筆者としては次のものに絞り、その代わり必須にすべきと考える。

肯定「会」「能」「可以」「想」「得」「应该」

否定「不会」「不能」「不可以」「不想」「不应该」

「想」は『現漢』をはじめ多くの文法書で助動詞とは表記されず動詞とだけ記されているが、「会」のように一部として助動詞用法もあるとすることはそれほど困難なことか不明である。とりあえず日本の教材では教学上の都合であろう多くが助動詞として扱っているのでここでも良しとしたい。

「要」を多くの教材が取り扱い、しかも早い段階でインプットしようとしている現状が実は中国語を教えそして実際に使うノンネイティブとしては非常に理解に苦しむところである。「要」の教材の中での取り上げ方の多くは願望と義務、すなわち「～したい」「～しなければならない」であり、『現漢』でも助動詞の筆頭として次の例文を示している。

③ 他要学游泳。(彼は水泳を学びたい ～ 学ぼうとしている)

④ 早点儿睡吧，明天还要起早呢！

(早く寝て！明日も早起きしなければならないよ！ ～ 早く起きなきゃね！)

※上記2例は強制力の加減に幅がある。どちらかといえばそれほど強くない。

教材でもその脈絡で取り上げているのだが、これをもとに学習者が作例したときに教員は往々にして「要」を「想」「得」「应该」に改めるケースが多く、ネイティブにとって決して使用頻度が低いとは言えないものであろうが、むしろ「要」についてはより高度な注意が求められている。少なくとも入門初級者にはそこまで求められないとの判断から、初修中国語では取り扱うこと自体がそもそも不適切であるとさえ考える。よって本稿では対象から外したい。

3.2 助動詞と複合動詞

さて構造からみるかぎり助動詞的な用い方をしている動詞がいくつかある。そもそも我々日本人の日本語的な感覚での解釈は可能や推量、当然にとどまらず、受身・断定・使役・打消・意志・勧誘・丁寧・尊敬・比況等様々なものを含み、しかも外国語においては副詞や語形変化等が扱うものも多く含まれている。英語では明確に、類推できるがゆえの省略を除けば、基本的に単独での使用はない助動詞であるが、中国語で「会」は単独で使用することもでき、また「想」「要」などは動詞であると同時に助動詞的な用法も高い頻度で使用され、「打算」にいたっては助動詞とは分類されていない²にもかかわらず実際にはほぼ助動詞的な用法で用いられるという例もある。また日本語では複合動詞にあたる「～し始める」について中国語では助動詞のような扱いで「开始」を用いており、この例では「～するのを好む」でも動詞句「～する」の前に助動詞のように「喜欢」を配置する。動詞句を含む目的節という説明をおおかたするようであるが、「开始」「喜欢」の場合「知道(知っている)」のような主述目的語とは異

なり目的節に主語は置かないのが通常である。

つまり英語のような語順と作用に着目した形での助動詞を意識すると「打算」「开始」「喜欢」等も助動詞のような理解で成立してしまう。特に「打算」は無理やり動詞と説明する方が現実的ではない。多くの教材が「想」だけは助動詞と半ば黙認しているような状況であれば、「打算」もそれに準じ、「开始」「喜欢」はせめて「助動詞的用法」として同列で取り上げることでより鮮明になる。複合動詞という概念がない以上、ここは連動文や方向補語・結果補語等と区別するためにもあえて助動詞という明確な枠で学習者に理解を促すことが有益なのかもしれないとさえ考える。「助動詞的用法」という見出しも考えるべきである。

4. 「会」「能」の可能義の区別における教学的考察

4.1 確認

「会」「能」は広義ではともに可能を表す助動詞として共通であるため並べて同時にインプットするケースが普通で、通常日本語を介しての説明では次のような文言が一般的であることをまずここで確認しておきたい。ここでは『中国語の環Ⅰ』（中検協会 2003）の記述を記す。なお取り上げる可能義のうち「能力」以外の語義については「会」「能」間の対比とは無関係のため割愛する。

「会」：練習によって身につけた技術などについて「～できる」／技術の習得の有無

- ⑤ 你会中文吗？（あなたは中国語ができますか）
- ⑥ 你会说汉语吗？（あなたは中国語が話せますか）
- ⑦ 你会游泳吗？（あなたは泳げますか）

※上記ではレベルを問題にしておらず、ただできるか否か。

「能」：習得した技術の深浅について「～できる」

- ⑧ 你能看懂中文报吗？（あなたは中国語の新聞が読み解けますか）
- ⑨ 你能游两公里吗？（あなたは2,000メートル走れますか）
- ⑩ 你能喝啤酒吗？（あなたはビールが飲めますか）

※基本行為はできるという前提で個々のスキルについて言及。

そして対比として⑦と⑨のパターンを用いて、「できるかできないかの表現と、どのくらいできるかできないかの表現とで区別する」という説明を施すのが一般的である。

また別の説明表現として比較的用いられているものに「後天的能力と、先天的能力とで区別する」というものもある。それを「練習などで誰でも身につけられる能力と、才能として特定の人にしか備わっていない能力とで区別する」と説明する教員もいる。大抵はこれで乗り越えてしまえば、あとは中級段階になってしまうと個々の例外のような扱いで済まされてしまう。

文法的な特徴に焦点をあてて「とてもシンプルに動作・行為そのものに限って言及する

可否と、目的語等に具体的な修飾語を用いた長めの文における可否とで区別する」という説明をする教員も存在する。事実それを裏付けるかのような、長さに明らかな差の存在する例文が教材上で並べられているケースも少なくない。

以上のような区別をもって「会」「能」が同じタイミングで指導されることが通常の文法シラバスにおいて一般的なのが実情であることをまずここで確認しておきたい。

なお「能」については「能力」の議論に関するもの以外に「許可・外的要因等による可否」という語義もあり、「可以」と並べて提示するものが多い。同じ「できる／できない」でありながら「能力」とは異なるこの部分について、まずは「能」の二つ目の語義として提示するにとどめるもの、あるいは「会」「能」「可以」をすべて「できる」という共通項で同時に提示するもの、以上二種が存在するが、この「許可・外的要因等による可否」の部分については、「能力」に関する「会」「能」のような細かい差を「能」「可以」の間で議論することはなく、また本稿においては学習者が早くから混乱を起こさないような提示順と提示量についてを主題としたいのであえて省略したい。念のためであるが省略させていただく「許可・外的要因等による可否」の例は下記のようなものを指す。

- ⑪ 明天我能参加。(明日わたしは出席できます)
- ⑫ 喝酒后不能开车。(飲酒後は車を運転できません)

4.2 学習者の理解との乖離

4.2.1 「能力」「先天的能力」「後天的能力」

自分自身も含めて我々には、あまりにも当たり前すぎて疑問に感じたこともないが、実は改めて考えてみるとよくわかっていないということが意外に少なからずある、という点に筆者は中国語教育の現場を通じてしばしば気づかされる。本稿の扱う内容の関連でいえば先述した「助動詞」とは何かということもその一つであるが、ここでは「能力」そして「先天的能力」「後天的能力」ということに対する学習者の理解についてまず検討したい。

学習者はまず「できる」という日本語と「能力」という日本語を結び付ける。その意味においてはどんな形でもどんなレベルでも「できる」であれば「能力がある」と理解する。それで「会」についてはそれを根拠に理解する。

一方で、日本語での会話における「できる」が、実際には「高いレベル」であるというイメージにも影響される。例はいくらでもあるが、「彼女は英語ができる」「彼女は料理ができる」「彼女は仕事ができる」等、究極は「彼女はできる女性だ」、これらはいずれも意外に「並外れた感」が自然に含まれている。「能力」という言葉自体に一般レベル以上のイメージがあるという現実を教員が無視して、いきなりレベルは問わない「ただできる」というところから「会」を説明すると、後述する問題も含めて学習者と教員との間に理解の齟齬が生じることになるかもしれない。

つづいて「会」「能」の能力を「後天的」「先天的」ということで区別するとその線引き

にしばしば食い違いが生じる。⑦の質問に対してある学習者が、

⑬ 我能游泳。(＊わたしは泳げます)

と答えた。学習者によれば、「自分は物心ついたころから自然に泳げるようになっていたのであり、特別な練習や訓練は経ていない。したがってこれは先天的能力である」というわけである。教員は、「⑬の文のような“能”では許可・外的要因による可否の解釈が可能になることもあるので不適」と説明するかもしれないが、それでは学習者は納得できない。学習者には「自分は生まれつき泳げる能力(才能)を持っている」「自分は練習を経ている」という「根拠」があるからだ。

ここで欠如しているのは、1: 魚のように生まれてすぐに泳げる「先天性」がない以上これは「後天性」のものとしか言えない点、2: 練習・訓練のほかに「会」として習得される過程には「見様見真似」や「試行錯誤」というものも含まれる点、である。最初からすべてを説明しすぎてかえって混乱を招くことがあってはならないので、従来の方法でスムーズに進む場合はあえて提唱するものではないが、これらの点を教員はしっかり心得ておく必要がある。

そして「先天的能力」という点でさらにいえば、「基礎は大方の人が一定の練習により獲得できても、その先の高いレベルに到達できるかは先天的能力によっても左右される」という意味で、「記録」要素が絡むことによる「能」の必要性を理解させ、そのうえで、その記録はたとえ低いものであっても「能」で表現するという理解のさせ方を提唱する。例えば練習をすれば誰でも到達できそうな次のようなケースである。

⑭ 我能游五米。(わたしは5メートル泳げます)

4.2.2 「典型的技能」「誰にでもできること」

相原茂 1997 は「会」に関連して「能力」を「典型的技能」³と「誰にでもできること」⁴とに分類している。鄒韶華 1997 はその区別の生じる行為を「或然性(蓋然性)」⁵行為」と「必然性行為」とに分け、魯曉琨 2006 は両者が同じものを指すと指摘した。

通常教学においては「会」「能」を用いることでどういった能力の表現になるのかという区別を説明し、それに見合う例示をし、4.1 にある枠にそぐわないものを非文として処理してしまうわけである。

⑮ 他会喝。(彼は飲める／酒に強い)

⑯ 他会买东西。(彼は買い物ができる／買い物上手)

さて⑮⑯はともに表面的には単純行為でしかないのに、その意味からいえば「能」はそぐわない。しかし語義からいえばごく基本行為としての誰にでもできる「喝」「买东西」についてわざわざ表現することもおかしさを伴う。ただ現実にはこの文は両方可能となる。学習者が入門初級レベルでこのような作例をしたならば、根拠となるそもそもの発想が理解不足によるものとして違う正解を与えることは可能だが、今後中級・上級と進む過程で

改めて助動詞をとりあげて追加インプットすることは教材上ないことを考えると、教員としては質問や添削に対応できる理論武装をしておく必要がある。(積極的にこちらから提示するか否かは別だが。)そこで筆者はつぎのようにまとめた。

⑮⑯は訳文にもあるように、実際には高いレベルの能力を表すのであるが、ならば「能」に置き換えることが可能であるはずだが、実際には⑮は可でも⑯はなじまない。そこには基本能力を獲得してから、さらにレベルが向上するにあたっての「先天的才能の開花」について存在する差というものの有無が絡むからである。⑮では「飲む」能力を手に入れたのちに、元来有するいわゆる「飲める」身体的体質の能力が自然に開花したものである。よく「飲みつけているうちに強くなった」などという人もいるが、やはりそもそもの体質があることに由来する。ところが、⑯については「買う」行為ができてから、上手な買い物ができるようになるにはさらに場数を踏んで経験を積むことによるしか実現の方途がない。「センスがある」と言葉ではいうが、そもそも生物が原始的に有する行為でなく「買い物」という制度的人為的行為についてはレベルの上達は習得の域を超えることはないものであり、したがって「能」は不適である。

つまり「誰にでもできること」について、あえて「会」を用いることで「非常に高いレベルでできること」の表現が可能になり、それはもはや比較にならないレベルという意味からは「記録」という概念すらも不要な状態で「能」を用いることも可能にする。ただし「買い物」のような制度的人為的行為については先天的才能が根本的に存在しないため、「能」を用いると許可・条件の解釈に寄ってしまうことになる。

「典型的技能」「誰にでもできること」という分類は教員として必ず心得たうえで、教学に導入する際には段階を考慮して特に入門初級では深入りせず、しかし短い会話による練習や中級以上になってこの例が誤用も含めて出た時に補足拡充することが重要である。初修段階でポイント提示が終わってしまう「会」「能」等基礎的助動詞の中・上級の語義をその先のどこかで補充する教材開発も重要な課題である。

また「会」の「練習による習得」については「見様見真似や試行錯誤を経ての獲得能力」も追加すべきである。

5. おわりに

本稿は入門初級において助動詞をよりスムーズ且つわかりやすく導入するための考察であり、助動詞そのものを多面的深遠的に議論することを目的とはしていない。初修中国語の教学上あえて踏み込まない点・範囲を明確にしながら、一方でそうした状況下でも出現する学生からの疑問にしっかり対応できるための教学準備をし、錯誤や過剰を防ぐべきであり、そのための一助になればと願う。なお本稿の例文は広く一般的に教材や練習問題等で使用される短い平易な例文中心にしたためあえて典拠は割愛させていただき、参考としたもののうち文中に挙げたもの以外の教材については列挙することも控えていただく。

注

1. 『動詞研究』の中で陶煉は助動詞をたびたび列挙し、しかも「これらがすべてというわけではない」とまで記している点については少々過剰な感があるが、そもそも助動詞を動詞の一種という考えをとる点において、英語や日本語のような動詞と区別したうえでの助動詞概念とは相容れないということであろう。
2. 日本出版の辞書では助動詞を動詞と並列のうえ区別した品詞分類をするものが一般的であるが、ここでは『現漢』に基づくものとする。
3. ここでいう「典型的技能」とは、一般的に獲得した技能およびできる人できない人の区別の存在する技能を指す。
4. ここでいう「誰にでもできること」とは、食べる・飲む・買う等通常は特段の訓練も経ずできない人がいない部類の能力を指す。
5. 「或然性」・「蓋然性」については中国語の用語として「必然性」に対して用いられているのであろうが、実は釈然としない使用である。本稿では「必然性」との区別がされていることで足りるのであえて言及はしないが、大いに問題のある用語だと考える。

引用文献

- 相原茂（1997）『謎解き中国語文法』講談社現代新書 pp.5-11
中国語の環編集室『中国語の環 I』日本中国語検定協会 p26
中国社科院語言所（2016）『現代漢語詞典 第 7 版』商務印書館 ※助動詞項目に関する部分
陶煉（1995）「助動詞」胡裕樹・范曉主編『動詞研究』河南大学出版社 pp.248-262
魯曉琨（2006）「助動詞的語義和功能」趙金銘総主編『對外漢語語法及語法教学研究』商務印書館 pp.18-46
鄒韶華（1997）「岐義成因挙隅」『語法研究和探索』商務印書館 pp.139-150